

## 85期事業のご報告

2023年4月1日～2024年3月31日

[会社概要](#)

[株式情報](#)

### 社長メッセージ



#### 収益性の上昇により4期連続で最高益を更新しました 引き続き「会社を強くする」ことで企業価値向上に努めてまいります

##### 事業環境・業績

2023年度は、PC・スマートフォン・民生機器など最終需要の鈍化により量産用途での設備投資は低調に推移しました。一方、世界的な電気自動車(EV)シフトや脱炭素社会に向けての需要を背景にパワー半導体向けの投資が継続したほか、生成AI関連で高性能な半導体向けに設備投資意欲の高まりが見られるなど用途によって強弱感がみられました。

このような事業環境において、当社では付加価値が高い製品の需要が増加したことを受け工場はフル稼働が継続し、グラインダを中心に精密加工装置が増加し出荷額は過去最高を記録しました。また為替による恩恵と高付加価値案件の増加、PIM活動による付加価値創出・原価低減などにより売上総利益率が上昇したことで収益性が向上し、4期連続で最高益を更新しました。

株主還元につきましては、配当方針に基づき、業績連動型の配当および剰余金からの追加配当を上乘せして1株あたりの配当金は過去最高の年間307円とさせていただきます(中間76円、期末231円)

##### 今後の見通し

依然としてPC・スマートフォンなど最終製品需要の本格的な回復が見通せない状況ですが、SiCパワー半導体と生成AI関連向け装置の出荷は高い水準で推移すると見込んでおります。昨年以降、需要が高まっている生成AI向け高性能半導体の製造に関連した技術は10年以上前から取り組んでいた開発テーマです。新しい技術が市場で立ち上がるタイミングを予測することは困難ですが、中長期視点で多様な研究開発テーマに取り組み、対応力を高め続けることが結果的にその時々で必要とされる需要に応えることにつながると考えております。

今後さらに増え続けると見込まれるお客様からの技術開発テーマに対応するため、羽田R&Dセンターの新棟建設を進めてまいります。

引き続き「高度なKiru・Kezuru・Migaku技術」に全力で取り組むことでステークホルダーとの価値交換性の向上を図ってまいります。

今後も企業理念である「DISCO VALUES」やWill会計、PIM活動など組織経営と事業経営の両面に注力し「会社を強くする」ことで企業価値向上に努めてまいります。

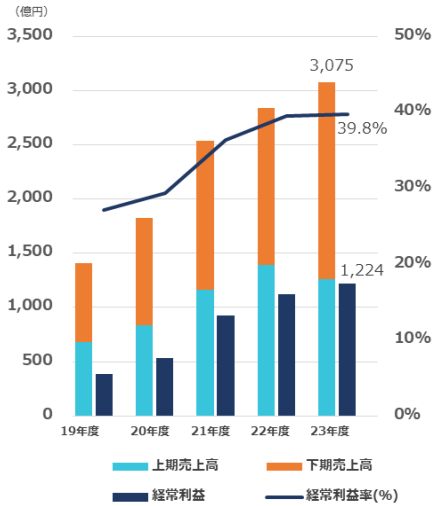
ステークホルダーの皆様におかれましては一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2024年6月

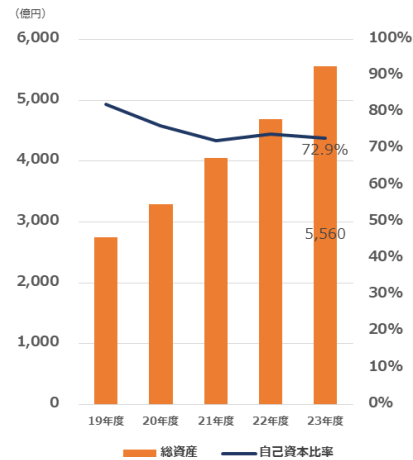
代表執行役社長 関家一馬

## 財務ハイライト

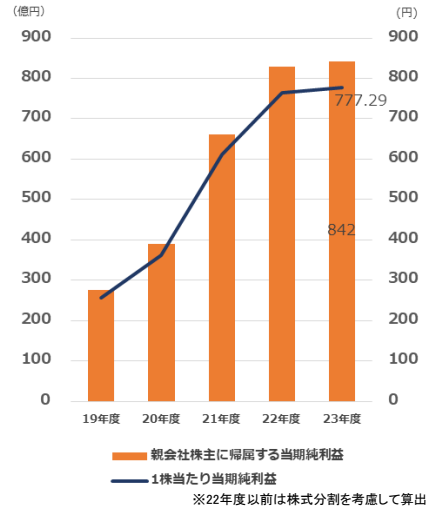
## 売上高・経常利益・経常利益率



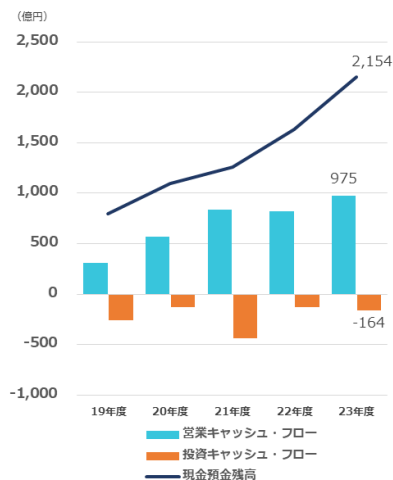
## 総資産・自己資本比率



## 親会社株主に帰属する当期純利益・1株当たり当期純利益



## キャッシュ・フロー



## 当期の概況

当連結累計期間（以下、当期）の半導体市場は、スマートフォンやPC向け半導体の需要が低迷する中、世界的なEVシフトや脱炭素化の進展を背景としたパワー半導体の需要継続と生成AI関連の需要拡大が下支えとなりました。このような市場環境のもと、精密加工装置の出荷はパワー半導体向けを中心に堅調に推移し、消耗品である精密加工ツールも顧客の設備稼働率等に連動して上昇基調で推移しました。

これらの結果、年間出荷額、通期売上高ともに4年連続最高となりました。損益については人件費や研究開発費が増加したものの、高付加価値案件の増加や為替影響等によりGP率が上昇したことで販売管理費の増加を吸収して営業増益となりました。

なお、羽田R&Dセンターの建替えに伴い特別損失として約75億円の減損損失を計上しておりますが、営業利益の増加で吸収し純利益も増益となりました。

以上の結果、当期の業績は以下のとおりとなり、各利益において過去最高を更新しました。

売上高3,075億54百万円（前期比 8.2%増）、営業利益1,214億90百万円（前期比 10.0%増）、経常利益 1,223億93百万円（前期比 9.0%増）、親会社株主に帰属する当期純利益842億5百万円（前期比 1.6%増）。

なお、当期時点で「4年累計経常利益率」は37.0%（前期は34.4%）となり、当社の目指すべき目標の一つである「4年累計経常利益率20%以上」を8期連続で達成しました。

## ■財政状態

当連結会計年度末の総資産は、前連結会計年度末（以下、前期末）と比べ872億61百万円増加し5,560億58百万円となりました。これは、主に現金及び預金、棚卸資産を中心とした流動資産が増加したことによるものです。

負債は、前期末と比べ287億42百万円増加し1,494億97百万円となりました。これは、主に電子記録債務や契約負債、賞与引当金が増加したことによるものです。純資産は、前期末と比べ585億19百万円増加し4,065億60百万円となりました。

## ■キャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローは、975億24百万円の収入となりました。これは、主に税金等調整前当期純利益や減価償却費の計上によるものです。

投資活動によるキャッシュ・フローは、164億3百万円の支出となりました。これは、主に工場設備などの有形固定資産の取得による支出によるものです。

財務活動によるキャッシュ・フローは、309億38百万円の支出となりました。これは、主に配当金の支払いによるものです。

これらの結果、当期末の現金及び現金同等物の残高は、2,154億86百万円となりました。また、「営業活動によるキャッシュ・フロー」と「投資活動によるキャッシュ・フロー」を合算した「フリー・キャッシュ・フロー」は811億20百万円となりました。

## 2025年3月期の連結業績予想について

半導体・電子部品業界において顧客の投資意欲が短期間で激しく変動することから需要予測が困難なため、業績予想の開示方法については、「1四半期先までの開示」としております。

予想数字については[決算短信・四半期開示](#)の「業績予想のお知らせ」をご参照ください。



3つのコア技術を深めることで、ディスコは産業と暮らしに貢献していきます。

#### 「高度なKiru・Kezuru・Migaku技術」とは

ディスコのビジネステーマを指しています。人類に欠かせない普遍的な技術である「切る」「削る」「磨く」という事業領域において、ディスコは世界オンリーワン企業でありたいと考えています。あえてローマ字で表記しているのは、これらの分野でディスコの技術が世界標準となり、日本語でそのまま通用するようなレベルを目指すという、強い思いが込められているからです。

#### 「遠い科学を身近な快適につなぐ」とは

ディスコの社会的使命(ミッション)を意味しています。日々進歩していく科学技術を、ディスコの「高度なKiru・Kezuru・Migaku技術」によって、人々の暮らしの豊かさや快適さに帰結させていきたい、という考えを表現しています。

#### ディスコが追い求める成長とは

企業の成長をどのように定義するかによって、経営の方向性は大きく変わります。ディスコの「成長」とは売上やシェア、規模の拡大などに依らず、2つの基準によって評定されています。ひとつはミッションの実現度が高まり、社会により大きく貢献できているか、もうひとつはお客様・従業員・サプライヤ・株主など、すべてのステークホルダとの価値交換性が向上しているか、です。